

# 「作業所学会」事始め

静岡福祉大学

増田樹郎

〈現場〉とは、いのちが立ち現れてはたらく場所のことです。そこには障害や病を大切ないのちの出来事として語り、触れ、伝え合う関係があります。ときに「障害」がバリアになり、わかりにくさ、生き辛さを作り出すことがあるとしても、そこでは「障害者」であるかどうかではなく、共に在ることこそがすべての契機であり、支援はバリアを解き、生きやすさをつくり出すためにあるといってもよいでしょう。作業所という現場は、制度としての「事業所」に留まるのではなく、障害のある人の〈地域〉のひとつであり、〈活動〉のひとつまであり、かけがえのない〈寄辺〉でもあるのです。

「学会」という堅苦しい冠を付したことに違和感を覚える人は少なくないかもしれません。俗に「研究者たちが相互に知識や情報の交換、研究成果の発表のための組織」ととらえるならば、その違和感は当を得ています。当事者を研究の対象として、その成果を競い合う関係は本学会には馴染まないからです。とは言え、優れた実践やハウツウは、ときに理論を超える説得力をもつことがありますし、理論を破る契機をも内包していることがあるのです。何よりも「作業所学」という全国初の現場主導の学会です。多くの報告や発言、議論をおして、自らが抱えた問いを自らが回答していく気概や実践こそが本学会の真骨頂でもあるのです。

その主たるねらいをいうとすれば、

一つは障害者支援の草分けとして歴史を形づくってきた作業所の「実践の思想」を次世代へとつないでいくことです。作業所が「事業所」と称したとしても、その基点に「はじめに当事者ありき」があることに疑いはありません。

二つには市場原理が急速に浸透していく福祉の世界において、新たな共生の地点を証ししていくことです。とりわけ、「就労Ⅱ自立」という「働き方改革」のあり方を検証していくことです。（障害者版の）市場原理が「障害者」と「就労能力」という二重の差別化を浸潤させていく状況があるからです。

三つには現場を支えつつ状況を変革していくスタッフを増やしていくことです。福祉を志し、ひとりの専門職になることは、「召命（コーリング）」つまりは同時代の状況の呼びかけに応答していくことにほかなりません。「姿なきを見、声なきを聴く」（記念講演）感性こそ、実践を支える共通感覚なのです。

さて、阿部志郎氏の記念講演では、きわめて格調高く福祉実践の思想を語っていただきました。彼は日本語には「スピリチュアリテイ」という訳語がないと指摘しています。訳語がないとすれば、これを理解することができません。「精神」でもなく、「魂」でもないので。

「人を根源的に支え、生きる意味を内発的に問いかけてやまない」ところの「霊的精神の見えざるエネルギー」だと阿部氏は定義しています。これを「福祉のスピリチュアリティ」とあるといえばまちがいでしょうか。

三つの分科会では、それぞれにきわめて闊達かつ個性的な議論が展開されました。その底流には「私たちのことを私たち抜きで決めないで (Nothing About us without us)」があります。地域生活支援にしても、就労にしても、本来〈選択〉する主体にとっては「ワクワク」「ドキドキ」の体験であるはずです。「意思決定支援」という制度的な枠組みからとらえるよりも、「生きる主体」の「答え」に辛抱強く寄り添うことが〈現場〉だと言えるのかもしれない。

